退魔師コハル・敗北の結末
～野蛮で低俗なオークの孕み嫁編～

基本絵　10枚
文字有差分込み（立ち絵含）　100ページ

【魔】

……それは古来より
人々を苦しめてきたルーツ不明な“何か”。

一口に【魔】と言っても様々な種がおり、
一般的に幽霊や亡霊と呼ばれる
『不定形』、河童や雪女などに
代表される『妖怪』等。
人間に害をなすものから
福をもたらすものまで
様々な【魔】が存在する。

封印・退治・駆除・隔離、
あらゆる手を使い、人々から【魔】を遠ざける。
そんな【魔】対処の専門家、その者たちを
ひとは **退魔師** と呼ぶ。

―私は退魔師の『コハル』。
元々は退魔師の家系じゃないけど
……十年くらい前、私の目の前で実の両親が
【魔】に殺された。
その時助けてくれたのがママ。
私はママに……退魔師に入門した。
【魔】に対する復讐……最初はそれが退魔師に入門した
理由だったんだけど、今は1秒でも早く偉大な
退魔師のママの役に立てるようになりたい
っていうのが本音。
まだまだ見習いの身だけれどいつかママに追いつける
ように……

今回の依頼は群れからはぐれて人間の集落を荒らしている『オーク』1体の退魔。本来群れで活動するオークだけどよほど協調性の無い個体だったのかしら……

ともあれオークの退魔難易度は最低のE。私1人でも十分に対処できるランク……。

1人だけで退魔するのは初めてだけど……

キャアアア!?

「あ……あ……
助け……」
ガクッ…
「あ？そろそろ
逝ったか　この穴も……
つたく使えねえなあ、
人間のメスは。
まあそこがいじらしくて
いいんだけどよお」

「こいつが依頼にあったオークね……」

「あ？これまた上玉のメスじゃねえか
自分からやってくるとは中々
いい心がけだぁ」

《こいつ……人間の言語を……オークの中でも
上位……族長クラスね……》

「あ……助け……？」

「うるせえ お前は逝っとけ」

グシャッ

「……あ……」

「すまねえなあ、俺らの時間に水をさすバカ穴は処分したからよぉ。さあて、抱いてやるよ、来な？」

「……初めての1人で貴様の退魔が貴様みたいなクズ妖怪で良かったわ……」

「あ？退魔？お前まさか……」

「やっぱりこれが、浜松名物。
餃子・味噌煮込」
パァー
「は、恥ずかしい…
う、うわわわ」

「……ぶ……ぶ……ぶ」
ハラリ
「極品 ポーション
「ゴブリン王女を生贄にされた」

「……」

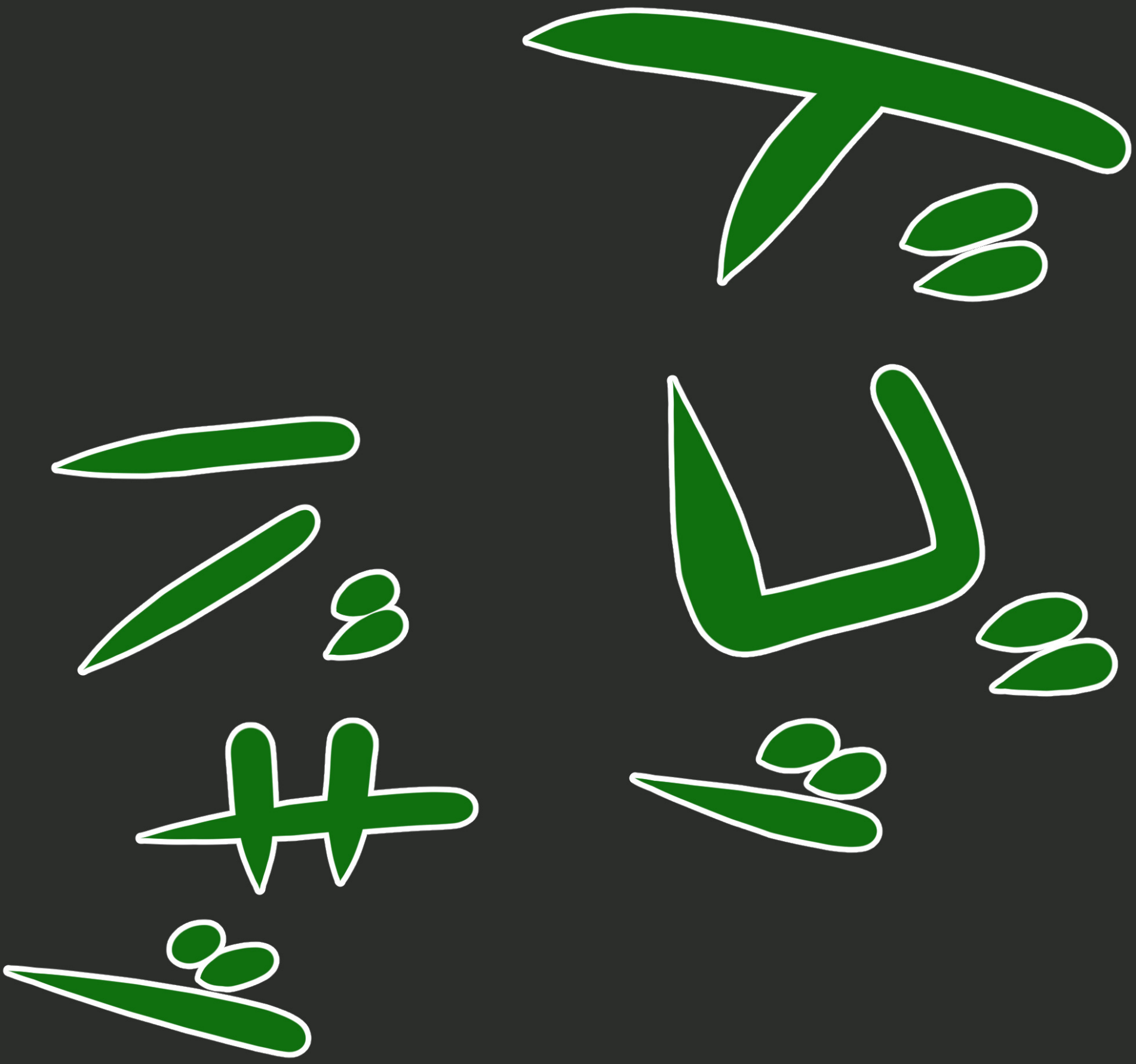
「……」

「この女性も……
私が駆けつけるのが
もう少し早ければ……」

「ごめんなさい……
せめて安らかに……」

0%

ボ
0%



「が……かはっ……」
「ブ……ブハハハ！」
（なっ……何が……邪封虚印はたしかに
こいつの魂を封じて……）

「あんな退魔師なら誰でも使うようなコテコテの封印術の対策をしてないとでも思ったのか？」

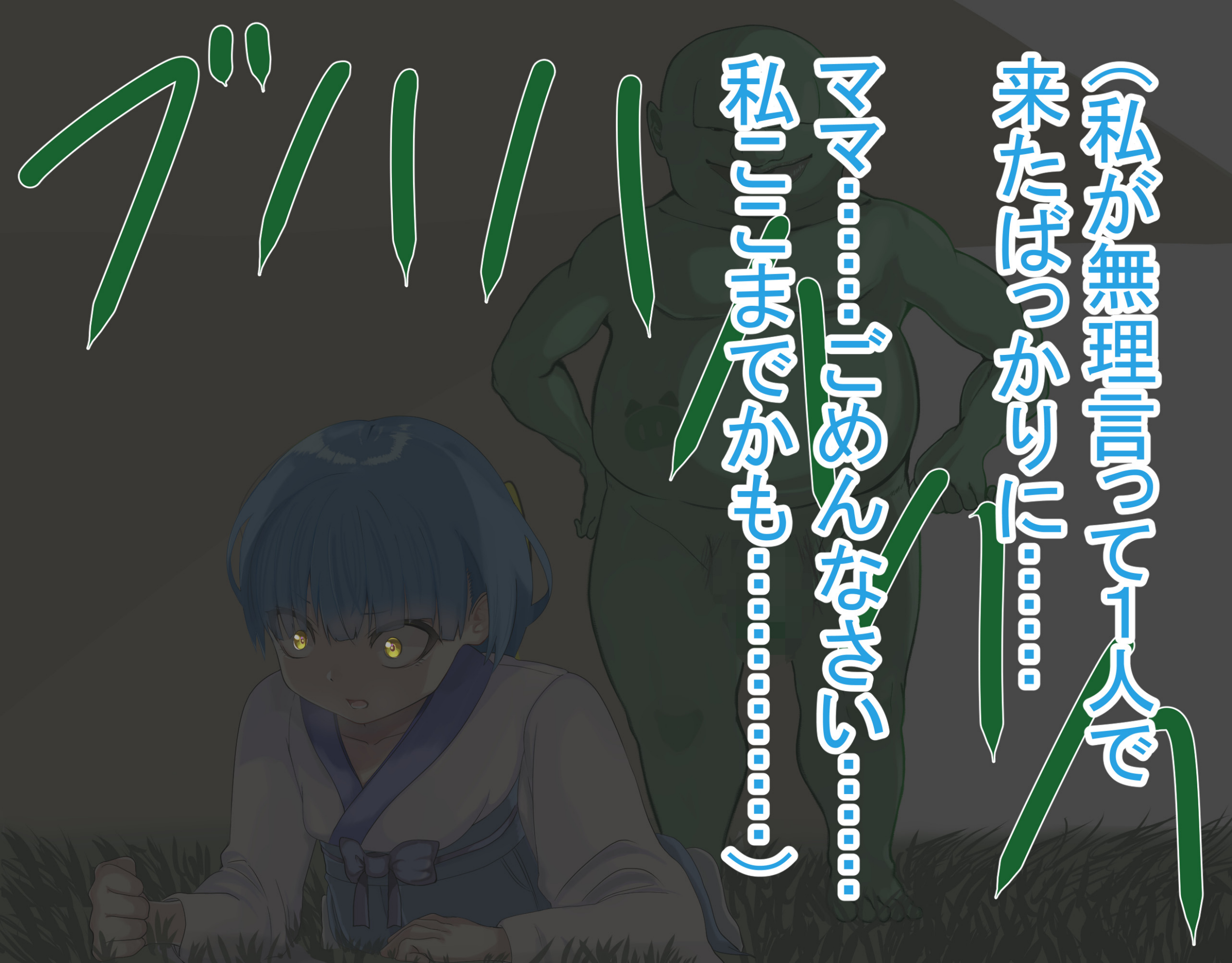
（くっ……なっ……身体が動かないッ！そんな、敗け……？私……死……）

ハッ

ハッ

ブククク……

「退魔師かぁ……退魔師のメスは抱いたことねぇなぁ、それにお前超上玉だしなぁ、可愛がってやるぜぇ」


ブリリ
（私が無理言って1人で来たばっかりに……
ママ……ごめんなさい……
私ここまでかも……）

「ハハハ、ヤツらの出ばなくらだ…」

「……ハッ」

「ブヒw目え覚ましたか、まあ数分だったが」

「こ、ここは……」

「ここは俺とお前の巣ってとこだなw
いっとくがお前に拒否権はねえ」
「人間に欲情する【魔】、ね……」
(さっきから思ってたけどなんてものぶらさげてるのよ……
知性はあっても品性はない、所詮【魔】ね……)

「牧草のベッドしかないが…
青空のもと地べたでヤるよりかは
お前もいいだろ？」

「クズが……女の子をなんだと思って……」

「あ……？今のは聞かなかったことにしてやるよ。
これ以上ボコるとお前死んじまいそうだしなぁ、
あとオレの〝ご主人様〟だ、わかったな？」

「はいはい」主人様、さっきから臭いので私を犯す前に水浴びでも行って来たらいかがですか？」

「ブフッ、ブハハハ！気に入ったわお前、完全に屈服させて俺の性奴隷にしてやるよォ」

（く……身体が動かない……早く回復してッ……）